

第6回「社会科教育研究の方法論の国際化プロジェクト」中間報告会

日本の社会科研究をどのように推進し
ていくかー方法と成果の提案ー
指定討論

広島大学

棚橋健治



「日本の社会科学研究はどこへ向かうのか」

||

黒船は本当に海の向こうからやってきているのか？

中教審答申で「教科と教職を架橋する新たな領域の必要性」が強調される現実は、これまでの社会科学研究は、どう認知されているのか？



研究方法論の検討・確立は何を求めて？

「教科に関する科目」担当教員と「教職に関する科目」担当教員とが共同で授業を行うなど、教科と教職の架橋を推進するなどの取組が求められる。併せて、**教科教育学の更なる改善も必要**である。

「**教科と教職を架橋する新たな領域**の展開を推進するため、例えば「**教科内容構成に関する科目(仮称)**」を新設することや、「**各教科の指導法**」を**各教科の内容と方法を総合した内容に改善**することが考えられる。」
(中教審答申)

- なぜ中教審は日本の社会科学研究は、このような要求を出すのか？
 - 私たちは何を以て社会科学研究と考えてきたのか
 - 教科教育学の40年の歴史に対する挑戦？
- 日本以外の社会科学研究は、この中教審の要求に応えるものになっているのか？ いないのか？

「日本の社会科学研究をどのように推進していくか」という課題が、学会の中での「研究のための研究」を発展させるための議論に陥らないことが重要



方法論の検討は、何を求めて、成果をどのように活用するかと一体化して検討しないと、教科教育学の議論にならないのではないか？

田中先生の「関心相関性」は方法論検討の枠組みとして興味深い

→さらに、どのようなRQをたてることが教科教育学のRQになるのかを、どう理論化するのか まで踏む込むことが期待される

「教科書の論理構成は、なぜ、そのようになっているのか」というRQは、なぜ教科教育学のRQになりうるのか ←この問いに対する解答の検討が方法論の検討になるのでは？

草原先生の「国家権力」「研究者」「実践者」の 関係の類型化

A: 研究・開発分離型(欧米型)

B: 研究・開発統合型(途上国型)

C: 研究・開発連携型(日本型)



方法論が異なる = 方法論の比較・検討は国
ではなく、この類型の相違を視点とすることが
有効



結果的に、国による傾向性があるため、国際比較になり、グローバル化に寄与

なぜアメリカでは、・・・のような研究方法が一般的なのか

なぜ英国では・・・のような研究は研究として認められないのか

なぜ日本の・・・のような研究は、国外では好奇の目で迎えられるのか、迎えられないのか